「文明」No.18, 2013　33-35

ブラジル学校高校生のポルトガル語と日本語の作文力調査（中間報告）

小貫大輔　教養学部国際学科教授

〔プロジェクト報告〕

Portuguese and Japanese Writing Competence of High School Students in Brazilian Schools in Japan

Daisuke Onuki
Professor, Department of International Studies, School of Humanities and Culture, Tokai University

This is an interim report of a study investigating bilingual/trilingual writing skills of high school students enrolled in Brazilian schools in Japan. The research is being conducted in collaboration with Lilian Terumi Hatano, Professor of Kinki University, and Kazuko Nakajima, Professor Emerita of the University of Toronto. In February and July, 2013, we visited two Brazilian schools and asked the 10th, 11th, and 12th grade students to write essays using the 'identity texts' approach, one in Portuguese and the other either in Japanese or English. They were also asked to fill in a questionnaire on their linguistic environments as they grew up. Out of 70 participants, 31 had moved back and forth between Japan and Brazil, 32 were born in Brazil and moved to Japan at different ages, and 7 were born and raised in Japan. While they all produced Portuguese essays with varying degrees of writing expertise, their Japanese writing skills were far more diverse: among the 29 who were unable to finish Japanese essays, some resorted to English in the middle in an effort to express themselves. These essays are currently being analyzed qualitatively in connection with the environmental factors. We hope to use the results as a basis for writing a guidebook for parents and teachers on raising Brazilian children in multilingual environments so that they would become an invaluable human resource for both Brazil and Japan.

Accepted, Dec. 12, 2013

はじめに

日本に住みながらブラジル学校に通う高校生たちは，十分にポルトガル語を習得しているのでしょうか．また日本語はどれほどこなすことができるのでしょうか．日本に 60 校ほど存在するブラジル学校には，バイリンガル能力をそなえた人間を育てるポテンシャルが期待されますが，そこで学ぶ子どもたちは，実際どれだけ二言語を習得しているのでしょうか．本研究では茨城県と岐阜県のブラジル学校二校の協力をえて，そこで学ぶ高校生たち 70 人の，特に作文力に焦点をあてて調査を実施しているところです．本稿では，2012 年度および 2013 年度に実施した調査の概要について紹介します．調査結果については現在分析中なので，研究の問題意識と調査の目的，方法についてひとまずご報告いたします．

なお，本調査は，文明研究所所員の小貫（教養学部国際学科）が近畿大学社会学部准教授でブラジル国籍の研究者リリアン・テルミ・ハタノ先生，およびバイリンガル教育の権威でトロント大学の名誉教授である中島和子先生との共同研究で進めているものです．本報告は小貫の文責によるものです．

原稿受理日：2013 年 12 月 12 日

1. 問題意識と調査の目的

バブル末期の 1990 年，外国人労働者の受け入れを望む経済界の意向をくんで改正された「出入国管理及び難民認定法」が施行され，海外の日系 2 世，3 世に日本に来て自由に就労できる地位が与えられました．するとその年の内に南米諸国から多数の日系人とその家族が来日するようになり，中でも世界最大の日系人人口を擁するブラジルからは，30 万人以上が日本に来て暮らすようになりました．子どもを連れて来日した人も多く，全国に 100 校ほどのブラジル学校が開かれて，一時期はおよそ 1 万人の児童生徒がそれらの学校で学んでいました．しかしリーマンショックがあって 10 万人以上のブラジル人が本国に帰国し，ブラジル学校の数も 60 校ほどにまで減少．そこで学ぶ児童生徒の数は現在 5 千人を切っています．他方，そのような逆風下でも日本に残ったブラジル人たちは，かえって定住化の傾向を強めていると言われます．

ブラジル人家庭が子どもをブラジル学校に通わせる理由としては，「ブラジルで進学するのに役立つ」，「ポルトガル語で

勉強できる」,「ポルトガル語の勉強ができる」が上位にあげられてきました（小内，2009）．しかし，実際にはブラジル学校で学んだ後にブラジルに帰国・移住しないものが増えています（川口・丸井，2013）．日本の（公立）学校に通った子どもは日本語，ブラジル学校に通ったものはポルトガル語のモノリンガルという極端な選択になってしまいがちな中，これからのブラジル学校には，帰国準備のための教育ばかりでなく，日本とブラジルの両国の言語・文化を身につけた人材を育てるバイリンガル教育機関としての役割が期待されます．

本研究は，以上のような問題意識のもと，ブラジル学校で学ぶ高校生たちの 2 言語習得状況と，彼らの自己認識・アイデンティティの実態を調査しようというものです．研究が目標とするのは，①言語習得の実態（ポルトガル語と日本語の作文力），②自己認識・アイデンティティ，③両者（①と②）の関係の 3 点について把握することにあります．

2. 調査の方法

本研究では，言語環境に関するアンケート調査とポルトガル語作文力調査を 2013 年 2 月に，日本語の作文力調査を同年 7 月に実施しました．

対象

2 月と 7 月の両方の調査に参加したのは，岐阜県と茨城県の 2 校のブラジル学校に通う高校 1〜3 年生の計 70 名でした．高校生を対象としたのは，本人に自分が育った言語環境について振り返ってもらうことで，言語環境が 2 言語の習得にどのような影響をおよぼすかについての考察をえることを狙ったためです．A 校では 50 名，B 校では 20 名が参加，そのうち男子生徒は 34 名，女子生徒は 36 名，またブラジル生まれは 48 名，日本生まれは 22 名でした．

調査方法

言語環境についてのアンケート：名前・生年月日・住所などの基礎的データの他に，家族やその他の身近な人との会話で使用する言語，言語環境を含む成育歴を記入し，ポルトガル語と日本語の使用状況・能力について 15 項目からなる質問に答えてもらいました．

ポルトガル語作文力調査：「日本を知らない人に日本のことを説明してください」という指示を与え，40〜45 分の授業時間の中で書いてもらいました．

アイデンティティ・テキストを使った日本語作文力調査：3〜4 名の小グループに分かれて日本人大学生 1〜2 名の協力者たちと一緒に作業しました．絵と（可能な範囲での）日本語の作文で自己紹介を準備した後（できない場合は英語，またはポルトガル語），それを口頭で発表してもらいました．同時にそれをビデオで記録しました．

なお，アイデンティティ・テキストについて補足すると，これはバイリンガル教育の権威であるトロント大学のカミンズが提唱した教育的アクティビティで，「文章でも，口頭発表でも，映像でも，ミュージカルでも，複数のメディアの組み合わせ」で様々な形式を用いて自分のアイデンティティや人生について表現してもらうものです．カミンズは，マイノリティ言語の児童生徒たちがそれをオーディエンスと共有し，肯定的なフィードバックをえることで，「自分のアイデンティティをより前向きに映し出す鏡のような役割を果たす」と説明しています（カミンズ・中島，2011：p.108）．本研究では日本語による作文や口頭発表に必然性を持たせるためにも，日本人大学生たちの協力をえてオーディエンスとなってもらい，高校生たちが日本語で自分を表現することをサポートしてもらいました．

3. 考察

作文力調査の結果は現在分析中ですが，調査の対象となった 70 名の高校生の成育歴について見ると，「日本生まれ日本育ち」が 7 名，「ブラジル生まれ」が 32 名，「日本とブラジルとの間を行ったり来たりして育ったもの」が 31 名いるなどしてたいへん多様なものでした．みなブラジル学校で学んでいるので，ポルトガル語は全員が何らかの作文を創出していましたが，日本語の作文は創出量だけ見ても個人差がたいへん大きく，まったく何も書けていないものから，日本人と見劣りしないものまで様々ありました．日本語での作文がほとんど書けない生徒は 70 人中 29 人でしたが，その中には英語で作文を仕上げたものもいて，自分なりの戦略をもって調査協力者の日本人大学生たちとコミュニケーションを取ろうと工夫する様子が見られました．その点，アイデンティティ・テキストという方法を使った効果があったと感じています．

日本に住むブラジル人高校生についての研究には，言語環境について調べたものがありますが，言語習得度についての研究となると，自己申告，自己評価に基づいたものがほとんどで，言語能力を客観的に測って分析するという研究はま

れです．調査対象者の数が 70 人というのも珍しく，きちんとした分析をして結果を学会などで発表していきたいと考えています．

参考文献

小内（2009）『在日ブラジル人の教育と保育の内容（講座トランスナショナルな移動と定住－定住化する在日ブラジル人と地域社会　第 2 巻）』お茶の水書房

カミンズ（2011）「マイノリティ言語児童・生徒の学力を支える言語心理学的，社会学的基盤」カミンズ・中島『言語マイノリティを支える教育』慶應義塾大学出版会，pp.85-115

川口・丸井（2013）「在日ブラジル人生徒とその保護者の将来計画とは―ブラジル人学校での調査から」『愛知教育大学研究報告・人文・社会科学編』62 輯，pp.27-32